

歌舞伎へのいざない

ユネスコの「人類の無形文化遺産」にも登録されている、日本の伝統文化の一つである歌舞伎だが、実はもともとは庶民のものだった。長年歌舞伎役者として第一線で活躍し、海外公演もこなす坂東彌十郎氏が、歌舞伎の歴史と魅力を語った。

講師：坂東 彌十郎 氏

歌舞伎俳優



出雲阿国が創始した歌舞伎は庶民の芸能だった

現在、歌舞伎は能、狂言とともに日本の三大古典芸能といわれる。しかし、実は昭和初期までは、能や狂言は公家武家などの支配階級が楽しむ高尚なもので、歌舞伎とは格が違いとされていた。

歌舞伎はもともと庶民の芸能だ。文献によると、歌舞伎の始まりとされるのは、戦国時代が終わり平和になった1603年、京都四条河原で出雲阿国が率いる女性たちが念仏踊りをしたことだ。少し妖艶な衣装で踊っていたため、出演する女性たちを巡って観客の間でトラブルが起きてしまい、「女歌舞伎」は禁止されることとなった。

その後、成人前の少年が出演する「若衆歌舞伎」が人気を博したが、男色なども絡んで、こちらも風紀を乱すものとして禁止される。代わって登場したのが、成人男性が演じる「野郎歌舞伎」で、これが現在の歌舞伎につながっている。

江戸に芝居小屋を建てた猿若勘三郎、隈取を始めた初代市川團十郎

江戸初期に歌舞伎の発展に大きく貢献したのが猿若勘三郎だ。関西から江戸に来た勘三郎は、それまで河原で興行し、観客が芝生に座って観劇していた歌舞伎を、中橋（現在の京橋辺り）に建てた小屋の中で行った。これが江戸における初の芝居小屋とされる。

幕府は、遊郭とともに芝居小屋も許可制とした。江戸には当初数多くの芝居小屋があったが、やがて中村座、市村座、森田座、山村座の四座となり、絵島生島事件（諸説あるが、歌舞伎役者と大奥の女中の恋愛騒動）で山村座が廃座となった後は、他の三つの小屋が「江戸三座」として知られるようになった。

当時の江戸歌舞伎では、派手な衣装やかつら、白粉による化粧、大仰なセリフや「見得」と呼ばれる演技など、現在の歌舞伎に受け継がれる要素が次々に登場した。その一つが、「荒事」（化粧や衣裳、演技などが全て誇張された豪快な芸）を得意とした初代市川團十郎が生み出した「隈取」だ。現在ではいくつもの種類があり、芝居を盛り上げる上で大きな役割を果たしている。

歌舞伎は誰でも気軽に楽しめるバリアフリーの芸能

ところで、江戸時代の歌舞伎役者は、人別帳にも載らず、「河原乞食」とも呼ばれた。それが変わるきっかけとなったのが、1887（明治20）年、天皇が能、相撲に続き、九代目市川團十郎、十二代目守田勘彌らが出演した歌舞伎を観劇（天覧歌舞伎）したことだ。その後、

歌舞伎役者の地位も一気に向上した。一方で、歌舞伎は高尚なものというイメージが形成されていき、敷居が高いと、歌舞伎と距離を置く人も増えていった。

本来、歌舞伎は年齢、性別、社会的地位などにかかわらず、誰もが気軽に楽しめるバリアフリーの芸能だ。誰でもチケットが買え、観劇する服装も自由。芝居の内容も実在の事件を扱った『忠臣蔵』から、ホームドラマともいえる「世話物」、宙乗りが売り物の「スーパー歌舞伎」など、多種多様なものがある。言葉が通じない海外でも、歌舞伎の評価は高い。

近年、歌舞伎の海外公演が減っているが、私は3年前にパリ、ジュネーブ、マドリードで自主公演を行った。歌舞伎の見方に関するレクチャーを挟んで、『積恋雪関扉』などを上演したが、終演後は熱狂的なスタンディングオベーションが巻き起こり、大いに感動した。今後も海外公演を敢行すべく計画中で、いずれは海外に歌舞伎仕様の劇場をつくることを夢見ている。

